

知章朝臣 五葉ノ松下ニ可埋春秋七日夏五日冬十日、
 山田尼 茶碗のつぼもしはつきなどにいれてふたよくおほひて、そくぬしてかみをして、よ
 くみづいるまじく封じて、梅樹のもとにうづむべし、それあめなどいりてながる、もあしかり
 ぬべし、花の木のしたのつちをものにかきいれて、うづみたるいとよし、又水のほとりみちのつ
 じ、むまの矢のなかにも、ものにまたがひてうづむべし、あるひは十日、もしは廿日などうづめ、く
 ろぼう、梅花などに木のしたにうづみて、春秋は五日、夏は三日、冬は七日ありてとるべし、土をほ
 ること二尺ばかりなり、

〔後伏見院宸翰薫物方〕薫物秘方

黒方 沈 八兩重シ 丁子 三兩頗重シ 貝 一兩二分輕シ 白且 二分輕シ 薰陸 二分頗輕シ、自
 雁香 一兩殊重シ 以上上方

沈 六兩 丁子 二兩一分 貝 一兩二朱 白且 一分二朱 薰陸 一分二朱 麝香 二分二朱 以上
 中

沈 四兩 丁子 一兩二分 貝 三分 白且 一分 薰陸 一分 雁香 二分

射香半分散をもてあはせ、半分あまづらに合て後是をさす、又諸香のかるさ重さの用心、かみに
 なづらへて心えべし、凡黒方四季に通用す、尋常ながらに只此方を用る也、他方は其時にあらざ
 れば、あながちに用ざる也、

合次第、手ばこのふたにうすやうをまきて、其上に沈を置てかきひろげて、雉子のはねを持って格
 子のごとく是をわかづ、其上に間ごとにあまねく丁子をわかち、置終りて能々かき合す、和合の
 様、以下准之、中より分て二になして是を置て、そのなからをかきひろげて、雁香半分あへてかき
 合せて暫置て、射香に合せざるかたほし、暫置て混合せず、又別所に貝香を置て、其上に白且を置